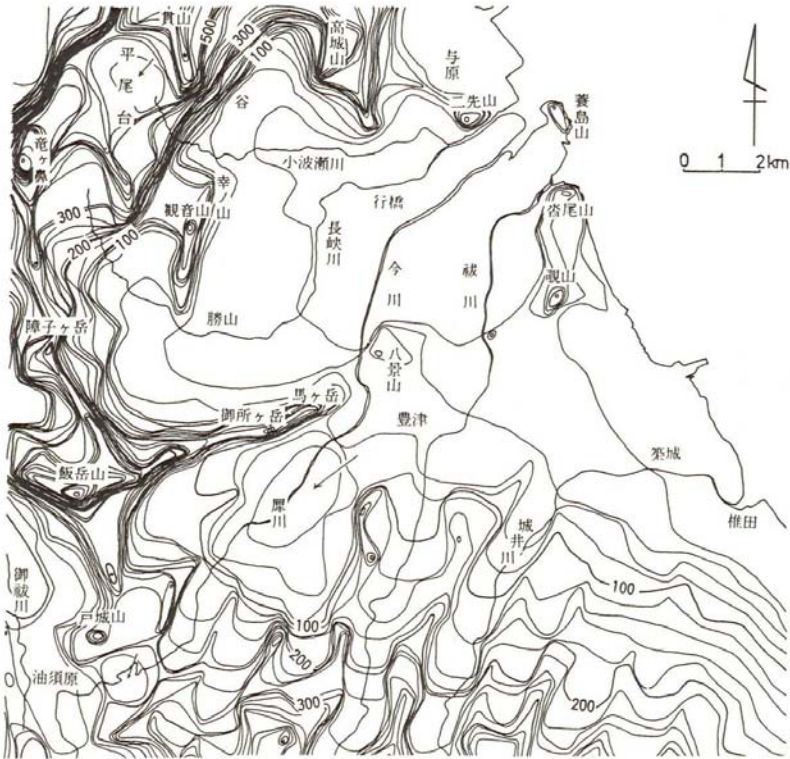


第三章 地 形

第一節 豊津町を含む行橋平野の地形

一 行橋平野の概観

行橋平野はその三方を山地に囲まれた臨海平野である。北には貫山（七二一・六メートル）、水晶山（五三二・三メートル）、高城山（四〇五・九メートル）などの山峰からなる中起状山地が、西方には平尾台カルスト台地と障子ヶ岳（四二七・三メートル）、飯岳山（五七三・〇メートル）の中起状山地が、南方には英彦山、犬ヶ岳などの大起状山地が、それぞれ分布する。このうち、北・西方の山地は古生界や中生界からなるが、南方の山地は主として第四系からなる。この山地の山麓部には緩斜面の発達がよい。平野の内部には残丘が点在し、観音山、幸ノ山、二先山、蓑島山、杳尾山などがある。また飯岳山から東北東方向へ御所ヶ岳、馬ヶ岳、八景山、観山へと連続する飯岳地塊列（東木、一九二八）がある。この地塊列は地形構造上、行橋平野を二分する山地列で、北部の行橋平野主部（行橋盆地）



第3図 行橋平野の接峰面図

等高線間隔は20m (幅1km以下の谷埋めによる)

は田川変成岩類や花崗岩類などの古期岩類の分布地域にあたり、浸食盆地的な性格を持つ。南部は古期岩類とその上に不整合でのる第四紀火山岩類からなり、犀川盆地のように浸食盆地もみられるが、山麓緩斜面や扇状地が広く分布する(第3図)。

行橋平野の水系は北から長峽川、今川、祓川、城井川があり、城井川が椎田で周防灘に注ぐほかはすべて養島付近で周防灘に注ぐ。各河川の水源地帯の地質をみると長峽川は古期岩類分布地域を水源とするが、その他の河川は第四

紀火山岩類からなる英彦山・犬ヶ岳山塊を水源とする。このうち今川は流域の大部分が古期岩類地域にあり、また中流部の赤村油須原で遠賀川水系・御み被川まきの上流を争奪し（波多江、一九七七）、また犀川の盆地を持つことから、むしろ古期岩類地域の水系とみなせる。これは平野部に入ってから河川勾配（長峽川〇・一四度、今川〇・一八度、祓川〇・四二度、城井川〇・四九度）にも現れている。すなわち長峽川・今川両水系は緩やかな勾配を持ち、また今川は中流部に盆地を持つため、より下流への粗粒物質の運搬が少なく、逆に祓川・城井川は英彦山・犬ヶ岳山塊から途中に著しい盆地部を持たないまま急勾配で流下するため、粗粒物質を直接周防灘まで運搬していると思われる。

二 行橋平野の台地

行橋平野の台地は海成段丘と河成段丘からなり、平野の北部と南部で性質を異にするが、それは後背山地の地質に負うところが大きい。ここでは、段丘面を高位から高位段丘（M1）、高位段丘（M2）、中位段丘（M1）、中位段丘（M2）、低位段丘（L）の各面に区分した（第4図）（千田、一九八四）。

(1) 高位段丘（M1）面

行橋平野南部に分布する最高位の段丘面で、更に南方の中津・宇佐平野では広くみられる。本段丘面は英彦山・犬ヶ岳山塊を取り巻くように分布することから、耶馬溪層および筑紫熔岩からなる山地の開析によって山麓に形成された最初の段階の扇状地と考えられるが、その後の浸食により丘陵状の地形を呈する。